

学生自治の取り組みを広げ、 より良い学生生活、医師養成を実現しよう

はじめに

全日本医学生自治会連合（以下、医学連）は、全国民の利益に基づき、医学生の利益を守るため活動しています。そのための交流や連携、情報収集・発信を絶えず行うとともに、全国各地の医学生の自治活動に支えられ、民主的に拡大・発展してきました。

医学連大会は、加盟校の学生はもちろん、より多くの医学生とともに自治会活動について交流したり、医学生を取り巻く状況や医師養成について学んだりしながら意見を出し合い、要求実現の道筋を決定する場です。現在、世界的な新型コロナウイルス感染症（COVID-19¹）の拡大により社会情勢が大きく影響を受けており、昨年の医学連大会は延期を余儀なくされました。医学生を取り巻く状況も日々刻々と変化しており、勉強や試験、学生活動など様々な場面で影響が出ています。そんな状況の中でも、6月にはオンラインという形で臨時大会を開催することができ、医学連は新体制としてスタートすることができました。この一年間は、臨時大会で決定した方針にのっとり、感染拡大の影響下でも医学生の学ぶ権利が侵害されることのないよう、医学連として活動を続けてきました。さらに、この状況下で学生自治の必要性に気づき、新たに自治活動を始める学生も現れてきており、全国的にも自治会発足へ向けた機運が高まる1年となりました。

この決議は、今年1年間の「全国の学生自治会の取り組みや成果」と「医学連の活動や成果」を振り返ってまとめ、これから1年の活動の基本方針を掲げた大切なものです。この決議の構成は、以下のようになっています。

【第1章 学生自治会、医学連の意義と魅力】

第1節 医学生の願いを集めて実現していく—各地の自治会活動の取り組みから—

第2節 全国の学生自治会に共通する切実な願いを実現—医学連の役割と取り組み—

【第2章 医学生の切実な要求を実現し、学びがいのある医学部にしよう】

第1節 新型コロナウイルスの医学生への影響—医学生が安心して学べる場を—

第2節 学生と地域、双方にとって魅力的な地域枠制度とは—管理より支援を—

第3節 学費値上げ、新修学支援制度に関する活動—学生が平等に学べる場を作ろう—

第4節 医学部入試不正問題—医学部における差別、ハラスメントを絶対に無くそう—

第5節 医学生が抱える不安と医学教育への参画—より良い医学教育の実現のために—

第6節 医師の過重労働—医療者自身の命と国民の健康を守るために—

¹ WHO が発表したもので、COrona Vlrus Disease-(20)19 の意。

第7節 学生の一致する要求を伝える活動—医学教育や施設を充実させよう—

第8節 初のオンライン医ゼミ成功へ—学生の学びたい要求実現を絶やさないために—

【第3章 自治会活動、医学連の活動の発展のために】

第1節 自治会活動の発展に向けて

第2節 サークル活動、学園祭、学習会、新歓など学生の自主的活動を活発に

第3節 自治会の建設・医学連加盟を進め、多くの医学生の要求を実現しよう

【第1章 学生自治会、医学連の意義と魅力】

ここでは、学生自治会や医学連の基本的な活動や、その意義と魅力について各地の取り組みを交えながら述べています。

第1節 医学生の願いを集めて実現していく—各地の自治会活動の取り組みから—

学生自治会の取り組みは、各大学の状況に応じて多様なあり方、活動の仕方がありますが、学生自治会活動の共通する性質として①学生の一致する要求で力を合わせる②規約に基づいた民主的な運営をすること、が挙げられます。

①学生の一致する「要求」で力を合わせる

大学生活を送っていると、その中で様々な不満や要望が生じてくることと思います。「特定の学年のカリキュラムが厳しすぎる」「過度なストレスや不安を感じながら授業やテストを受けざるを得ない毎日が続いている」「臨床実習を充実させてほしい」といったカリキュラム上の問題、「老朽化している施設を改修してほしい」「自習室や駐車場を増やしてほしい」「部活動の練習場所がない」といった大学施設の問題、「学費減免制度が突然打ち切られた」「新専門医制度に関する十分な説明がなく不安に感じる」といった全国的な課題などです。

こうした声のうち、学生個人の意見では解決が難しい問題を愚痴で終わらせず、その大学の学生みんなの共通の願いと捉え、実現を目指す組織が学生自治会です。学生自治会は学生一人ひとりの声をアンケート等で広く集め、考えの違いを前提としながらも一致する要求を見出し、医学生の総意として大学側と交渉していきます。このような体制を取ることで、学生全員がより良い大学づくりに参加していくことができます。

今期から医学連に加盟した近畿大学の学生連絡会では、学生からの要求を大学側に伝えて話し合う場である「キャンパスミーティング」を2018年度から開催するようになりました。今年度のキャンパスミーティングでは、以前から課題として挙がっていた過去問と解答解説の開示について改めて要請したところその要求が通り、過去問が開示されることになりました。解答解説についても、記述問題は難しいものの選択問題については作成して開示するとの回答がありました。試験問題については、各科での評価とブラッシュアップを行うようにし、質の向上を目指していくという方針も示されました。さらに、今年度はオンライン授業のため講義のレジュメがデータ化されて配布されていましたが、学生から今後対面授業が行えるようになってデータ化してほしいとの意見が多く寄せられ、今後も継続される

方針となりました。また、実習着については上下白のケーシー着用が義務付けられていますが、女子学生を中心に、黒ズボンも許可してほしいとの訴えがありました。この点についても大学側は理解を示しており、今後は改めて学生にアンケートを取るなどして具体的な方針を固めていく予定となっています。

②規約に基づいた民主的な運営により、大学づくりへの参加ができる

大学の自治とは、大学の全構成員の声を出発点として、より良い大学運営・学生生活を実現していくことです。大学の自治を担っているのは教授会や学務だけではありません。「大学の全構成員」とは学生・教員・職員であり、それぞれの立場から大学運営に関わるというのが本来のあり方です。学生は、学生自治会を通して、大学の自治と運営に参加するという仕組みになっています。

この仕組みの中で学生が大学の自治と運営に参加するために、学生自治会は“全員加盟制”をとっています。また、学生自治会の運営は規約に基づいた民主的な方法によって行われます。役員は選挙によって選出されるほか、学生大会などの議決機関も成立要件が定められており、一部の学生の考えだけでその方針を決定することができないようになっています。こういった手順を踏むことで、学生自治会による意見は全学生の総意として正当性を持つことが認められ、大学運営に関わることができるのです。

島根大学医学部学生自治会では、毎年規約に則り学生大会を開催しています。今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により対面での学生大会開催が困難であることから、オンデマンド形式での開催となりました。情報保護の観点から、普段講義にアクセスするために使っていた moodle を利用して大会の資料、動画、投票フォームを共有し、質疑応答も moodle 上で受け付けました。オンデマンド形式のため、動画内にキーワードを入れて投票の際に選んでもらうなど動画視聴をしてもらうための工夫をしたり、日程も動画閲覧と質問回答期間を3日間、投票期間を2日間と、余裕を持たせた設定にしました。結果として、学生が参加しやすくなったことで大会成立の条件も容易に達成できるようになったほか、資料をデータで配布できるため見やすくなったというメリットもありました。次回に向けた課題として、動画視聴状況を把握できるシステムを導入しようと考えているとのことでした。

群馬大学の学友会では、zoom を利用してオンラインで学生大会を開催しました。議案書に沿って説明した後その場で質疑応答も行い、決議には Google フォームを用いました。人数不足を懸念し各部活から原則3名の出席を義務付けましたが、オンラインとなったことで出席のハードルが下がり、結果的に例年よりも多くの学生が参加しました。学生大会後に実施したアンケートでは「zoom でも議事がスムーズに進行されていてよかった」「参加しやすかった」といった意見が多く寄せられ、オンライン上でも問題なく学生大会を開催できることが確認されました。一方で、「リアルタイムで行うメリットが感じられない（オンデマンド形式がよい）」という意見も一部ではみられ、今後の学生大会の在り方について改めて考える必要性も出てきました。

学生大会では1年間の活動のまとめ、これからの活動方針、予算等について学生全体で確認して決めることができます。一方で、学生大会を開くことは自治会役員にとっても自治活動の本質的な学習になり、民主的な運営を考えるきっかけにもなります。

今期は旭川医科大学、山梨大学、信州大学、群馬大学、近畿大学、兵庫医科大学、岡山大学、島根大学、宮崎大学で学生大会が行われました。大人数での集会が行えない状況下で、通常のやり方で学生大会を開催できない中でも、オンラインツールを活用するなど工夫して大会を開催できたことは大きな成

果です。それだけでなく、オンライン開催としたことで気軽に参加しやすくなったり、会場の問題が解決されてより多くの参加者を収容できるようになるなど、今後の学生大会の新たな可能性も示唆されました。これからも継続して、またより多くの大学で、医学生が主体性をもって学生大会を開催できるよう、自治会全体で意義づけを常に確認していきます。

第2節 全国の学生自治会に共通する切実な願いを実現—医学連の役割と取り組み—

①医学生を代表する唯一の全国組織

医学連は、全国の医学部・医科大学の学生自治組織の全国組織として1984年に結成²されました。現在、前回大会で新たに加盟校として迎えた近畿大学を含め、全国81医学部・医科大学のうち26大学の自治組織が加盟しています。結成以来、医学連はすべての医学生の権利を守り、発展させ、医学生の要求を実現するために活動してきました。医学生の要求は(1)学生の中で実現できる要求(2)大学側と相談して解決できる要求(3)国や関係諸組織・団体と交渉することで実現できる全国的な要求、というように大きく三つに分けることができます。最後の三つ目の要求は、学費や奨学金、地域枠制度、卒後臨床研修など全国の医学生の多くに共通する切実な諸課題がそれにあたり、個々の大学での取り組みだけでは解決しきれない切実な課題となっています。医学連は日本で「唯一の」医学部学生自治会の連合体だからこそ、全国の医学生と協力して、国や関係諸組織・団体と交渉することで問題を解決していくアプローチが期待されています。

医学連は全国の意見を集約し、様々な媒体や機会を利用してその声を発信しています。また、そこで得られた意見をフィードバックし、さらなる医学連の発展した活動につなげています。発信する媒体としては、医学連新聞、医学連ホームページやSNSなど、機会としては省庁交渉、医学教育学会での演題発表、各種メディアからの取材などです。

▼医学連ホームページ、SNS

今期は特に、医学連ホームページやSNSでの継続的な情報発信に力を入れて取り組みました。医学連の広報体制そのものを見直し、チームで広報を行う体制をとったことで、これまでよりも情報発信を充実させることができています。

昨年5月には、新型コロナウイルス感染拡大の影響により各地の自治会が活動停止状態にあることを危惧し、「全国の医学部自治会への提言³」としてオンラインミーティングの推奨や学生からの声の集め方、大学との連携の仕方などについてのアドバイスを掲載しました。全国の医学生が必要な支援にアクセスしたり、自分の大学に対して支援を求めるアクションを起こしやすいよう、各大学で行われた学生支援策の一覧⁴や、文科省による学生支援給付金の情報なども掲載しています。また、医学連の存在をより身近に感じてもらえるよう、今期は役員インタビューなども行っています。ぜひ覗いてみてください。

² 医学連は①対等・平等の原則②思想信条の違いを当然の前提に一致する課題で行動する③行動に際しての相互批判の自由と行動保留の自由の三点を合意した。

³ 医学連HP『コロナ対策に関して各大学自治会への提言を発表しました!』

<https://www.igakuren.jp/topics/againstcovid19/502.html>

⁴ 医学連HP『各大学独自の学生支援金広がっています!』 <https://www.igakuren.jp/topics/againstcovid19/539.html>

▼文科省、厚労省交渉

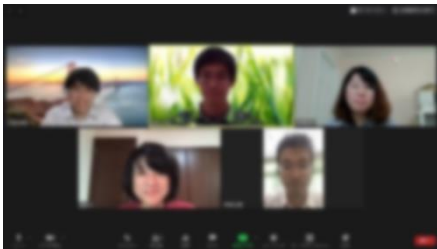
今期は新型コロナウイルス関連の要求をいち早く伝えるため、昨年12月18日に文科省交渉、23日に厚労省交渉を行いました。コロナアンケートで寄せられた意見を中心に、地域枠制度についての要求なども伝えました。詳細は2章1～7節を参照してください。さらに、文科省へは追加の要請要旨を送付しました。こちらでは、各大学で困っている具体的な事例を取り上げながら、全国的な課題の解決を要請しています。

▼医学教育学会での発表

医学連は毎年、医学教育学会⁵に参加して演題発表を行っています。今年度は鹿児島大学での開催が予定されていましたが、新型コロナウイルスの影響により中止となり、代わりにオンラインでの企画として「医学教育サイバーシンポジウム」が複数回にわたって行われました。

2020年7月11日に開催された「『COVID-19時代』の医学教育」では、医学連の書記長から報告を行いました。内容は「コロナの時代に生きる～医学生は何を思うのか～」と題した10分間の発表と質疑応答で、165人の医学教育関係の先生方にお聞きいただきました。報告の中では、オンライン授業ばかりで同期や先輩とのつながりが作れず、精神的に困難に直面している1年生の状況や、臨床実習が2か月間中止となったことを受けて、今後どのように穴埋めをしていくかが鍵となることなど、COVID-19による医学教育上の影響と、学生が困っていることを説明しました。先生方からも、たくさんの質問と議論をいただき、「学生の声を紹介してもらえてよかった」「医学教育を共に作るうえで、学生の声を強く発信して行ってほしい」と応援の言葉もいただきました。医学部としても混乱する状況の中、どのように学修の機会を保障していくべきか、学生と教員の更なる協働が必要です。

▼メディアでのアピール



時事通信の取材の様子 (2020.5.23)

医学生の要求を発信する方法の1つとして、メディアを通じたアピールも積極的に行っています。今期は、新型コロナウイルス関連の状況や活動に関して、多くの取材を受ける機会がありました。特に、感染拡大によって臨床実習生が受けている影響についてはNHKから取材があり、テレビ番組⁶内で取り上げられました。また、医学連が行ったアンケート調査の結果は、m3.com⁷をはじめ多くのメディアで取り上げられています。そのほか、オンライン授業や経済的影響、就活や病院見学について⁸など、感染拡大の状況下における医学生への影響について多くの取材依頼があり、医学生のナショナルセンターとして認知されていることを改めて実感しま

⁵ 一般社団法人 日本医学教育学会<Japan Society for Medical Education><http://jsme.umin.ac.jp/>

⁶ NHK「おはよう日本」

⁷ m3.com『医学生の9割、コロナ禍で臨床実習に制限、医学連調査』（2020年10月20日）

<https://www.m3.com/news/iryoshin/833885>

⁸ 時事通信『臨床実習もままならず、医学生に募る不安 進級は、卒業は…「柔軟な対策取って」と医学連』（2020年6月4日）<https://medical.jiji.com/topics/1672>

m3.com『オンライン授業内容次第で「今後も」-医学生座談会◆Vol.1』（2020年8月1日）

<https://www.m3.com/news/iryoshin/803434>

した。今後も医学連では積極的な調査によって医学生の実況を広く把握し、メディアを通じて社会に広く発信していきます。

②全国各地の学生自治会同士をつなぐ役割

医学連は各大学の学生自治会同士のつながりを作る役目も果たしています。個々の学生自治会で取り組んでいる活動の中では、困難を抱えることも多々あるのではないのでしょうか。そういった課題に突き当たったときに、他の学生自治会ではどのように活動しているのか、全国的にはどのような動きがあるのかといった情報を取り入れることで、活動のヒントが得られます。医学連の役員が各地の大学へ懇談に行った際には、「医学連の企画で、他大学の様子を聞いたりできるので良い参考になる」「自分の大学だけだとどうしても閉鎖的になってしまいがちなので良い機会だ」という声が多く聞かれます。また、改めて「自治とは何か」を医学連役員と共に学習することで、今後の自治活動の方向性が明確化し、日々の活動に活かすことができている。医学生の実況活動のナショナルセンターとして、他大学の様子や医学教育・卒後臨床研修などの全国的な動きについての情報提供を行い、大学との懇談に活かしてもらおうなど、各地の活動推進をサポートしています。

【第2章 医学生の実況な要求を実現し、学びがいのある医学部にしよう】

ここでは医学生が学生生活を送る中で、現在どのような要求があるのかを整理し、その実現に向けて医学連・学生自治会としてどう取り組んでいくかということについて述べます。

第1節 新型コロナウイルスの医学生への影響—医学生が安心して学べる場を—

①外出自粛で通常通りの学生生活が困難に

2020年3月ごろから日本国内でも新型コロナウイルス感染拡大が起り始め、外出自粛要請に伴い多くの企業がテレワークへの切り替えを行ったり、学校では休校措置が取られるなどしました。全国の医学部でも次々と対面での講義や実習が中止され、大学構内への立ち入りも制限されました。自粛期間が長引く中、講義や実習については次第にオンラインでの代替措置が取られるようになっていきましたが、このような事態はどの大学においても初めてのことであり、その内容や充実度はさまざま、といった状況でした。特に、解剖実習をはじめとする基礎実習や病棟での臨床実習についてはオンラインでの代替が難しく、当該学年の学生は十分な学習ができないことが懸念されていました。さらに、学生に対しては多くの大学でアルバイトの制限がかけられ、収入が減少したことによる経済的影響も出はじめました。後期に入り、感染対策を講じながら対面授業や実習が再開されたあとも、部活動など課外活動への制限が続く大学は多く、新入生が部活に加入できていないという状況も生じていました。これ以外にも「実習が延期になったりオンラインで代替されたりする場合には単位はきちんともらえるのか」「病院のマッチングはどうなるのか」といった、新型コロナウイルス感染拡大の影響による様々な困りごとが医学連に寄せられました。

②医学生の取り組み

このような厳しい状況の中でも、支援を求める学生の主体的な活動がみられました。

奈良県立医科大学では、外出自粛によりオンライン環境の整備のために出費が増えた学生が多く、看護学生を中心に経済支援を求める声が上がっていました。これを受けて看護科の学年総代がアンケートを実施したところ、オンライン環境整備のためにパソコンやWi-Fi機器を新たに購入した学生が実際に多くいることが明らかになり、適切な支援を求めるため、この結果をまとめて大学側に提出しました。この活動により、大学からオンライン環境の整備という名目で、医学生を含めた全学生に対して一律2万円の給付金支給が実現しました。さらに、このような取り組みがあったことを学生に広く知ってもらい、意見をまとめて伝えることの意義を感じてもらうため、医学科と看護科の学年総代全員の連名による文書を作成し、学生への報告も行いました。

弘前大学では、全国的な学生の経済的困窮の状況を受けて、「自分たちの大学にも困っている学生、支援を必要としている学生がいるのではないか」との思いを持った学生が集まり、「弘前大学コロナ禍経済支援要請プロジェクト」を立ち上げました。発起人は医学部学生自治会に所属する学生でしたが、全学部の状況を調査するため医学部自治会の枠組みを超えて、医学部以外の学部も含めた全学生を対象として活動を行いました。学生の経済状況についての的確に把握したうえで要請を行うため、学生を対象としてアンケート調査を行ったところ約480件の回答があり、そのうち46%が「新型コロナウイルスの影響で経済状況が悪化した」と回答しました⁹。さらに、「生活に支障をきたすほど困っている」「退学・休学を検討している」という学生の存在も明らかになり、大学に対して経済支援の要請を行うためオンライン上での署名活動を実施しました。その後学長懇談が実現し、アンケート結果と署名は大学側に届けられ、大学からも支援に前向きに取り組む姿勢であるとの回答が得られました。その後、大学による独自の学生支援策としてプレミアム食事券の販売、100円夕食の提供など様々な取り組みが実現しています。

③医学連の取り組み

医学連では、新型コロナウイルス感染拡大に伴う医学生への影響について個別に聞き取り調査などを進めていましたが、その中で医学生が抱える不安の具体的な内容が見えてきました。大学からの情報提供不足や一方的な指示、講義や実習の中止による単位等への影響が明確に示されていないことなどは、特に混乱を招く要素となっているようでした。この頃は大学が対面授業や実習を中止して間もない時期であり、それらがいつ再開できるかも分からず、国からの明確な指針なども示されていませんでした。この状況に危機感を感じ、医学連は2020年5月2日に緊急声明¹⁰を発表しました。声明の中では具体的に「経済的状況」「カリキュラム」「マッチング」などいくつかの項目に分けて要請項目を挙げ、国や大学といった具体的な要請対象についても示しています。また、時間の経過とともに新たに浮上してきた課題への対応も求めるため、11月10日には改めて医学連としての方針¹¹を決定、発信しました。

⁹ 東奥日報『弘大生アンケート「暮らし向き苦しい」46%』（2020年6月3日）<https://www.toonippo.co.jp/articles/-/360370>

¹⁰ 医学連 HP『新型コロナウイルスの影響に関して、緊急声明を発表しました！』
<https://www.igakuren.jp/topics/againstcovid19/488.html>

¹¹ 医学連 HP『コロナ対策について新たな方針を決定しました！』
<https://www.igakuren.jp/topics/againstcovid19/718.html>

より緊急的に事実確認が必要と思われる事項については、文科省、厚労省、共用試験実施評価機構に対して電話での聞き取り調査¹²を行いました。これにより、越境・感染をした場合の留年や退学といった措置（脅し）は文科省としてあってはならないという認識であること、マッチングの際には病院見学ができなかった学生に対して不利益が生じないようにと連絡していること、今後医師国家試験に関する情報がいつ頃発表されるか、といった内容が明らかにされました。

▼医学生を直接届けよう

7月12日には、医学連主催で「コロナ禍学生リレートーク」を開催しました。この企画は、全国の医学生がコロナ関連の様々な問題を抱えていることを受け、具体的な事例や行った取り組みなどについて学生自身に語ってもらい、情報共有や社会への発信の場として利用してもらおうというものです。各学年3～5名の医学生が発言したほか、傍聴者としてはメディアの記者や現役医師なども参加し、全体で62名の参加がありました。この企画では、様々な問題点を学生の生の声で語ってもらったことで、学生の困りごとを可視化することができました。また、異なる大学や学年でもお互いの状況を知り、共通点から問題意識を共有することで、まさに学年ごとにバトンをつないだ“リレー”となりました。これらの問題提起を受けて、医学連としても全国の医学生の声丁寧に取り上げ、早急かつ継続的に取り組んでいく必要性を感じました。

▼全国の医学生を対象とした意識調査で現状を明らかに

さらに、より多くの医学生の状況を客観的に捉え、適切な対策や支援の要請を行うため、医学連では「医学生を届ける！コロナ時代の意識と生活の実態調査」を行いました。時期により状況が変化していることを考慮して複数回の調査とし、第1回¹³は2020年8月10日～9月30日の期間に実施しました。31大学から1082件の回答があり、10月20日に第1回の分析速報を発表しました。第2回¹⁴は同年12月3日～31日の期間に実施し、49大学から1374件の回答を得ました。調査項目は、経済状況、学修環境(一般教養・基礎/臨床医学/臨床実習)、就職活動、課外活動、人との繋がり、大学との関係、精神的な状況などコロナの影響について幅広く質問する内容となりました。以下では、第1回の調査結果から一部を紹介します。



経済状況については、63.4%の学生がアルバイト収入について「減った/ゼロになった」と回答しました。「バイトから生活費や教材費などを出す予定だったが職種が制限され、国の支援金では2ヶ月分の家賃光熱費にすら全く足りず経済的に辛い。(弘前大学2年)」など支援が不足していることを訴える声が寄せられました。学習環境に関しては、講義が実施されず資料配布のみとなっている事例が多くあり、そうした学生では学修到達度の自己評価が低いことが明らかになりました。「pdf資料のみの教科もあり、確実に学習不足です。実習やテストにあたり不安です。(高知大学4年)」など不安の声が寄せ

¹² 医学連 HP 『省庁・機構に電話での聞き取りを行いました！』

<https://www.igakuren.jp/topics/againstcovid19/517.html>

¹³ 医学連 HP 『医学生を届ける！コロナ時代の意識と生活の実態調査<第1回>分析速報』

<https://www.igakuren.jp/igakuseidata/2020/10/702.html>

¹⁴ 医学連 HP 『医学生を届ける！コロナ時代の意識と生活の実態調査<第2回>分析速報』

<https://www.igakuren.jp/igakuseidata/2021/02/806.html>

られました。実習で経験できなくなっていることとしては、患者さんへの問診、回診への参加、病棟への立ち入り、外来見学はいずれも半数以上の実習生が当てはまると回答しました。「医師になるための最低限の手技さえ身につかないまま卒業するのはかなり不安がある。(宮崎大学5年)」など切実な声が寄せられました。

以上のような分析結果は、医学連のホームページで公開し、NHKのニュース番組「おはよう日本」や医療系ニュースサイト m3 など報道各社で取り上げられました。また、全国の医学生に向けては結果をダイジェストで伝えるチラシを作成しフィードバックを行ったほか、自治会交流集会でも紹介しました。さらに、12月にオンラインで実施した文科省交渉では、アンケート結果をもとに要請を行い、「新型コロナウイルス感染症が拡大する中においても、学生の理解や納得を得ながら学修機会を確保することは重要と認識しています。」などの回答を得ました。現在第2回の調査結果も合わせた分析を行っており、3月末には最終報告を発表する予定です。

医学連では、37期の調査で寄せられた不安の声や支援を求める声に寄り添う活動ができたかを総括するとともに、38期以降でも時々の情勢に応じて発信を行っていきます。

第2節 学生と地域、双方にとって魅力的な地域枠制度とは—管理より支援を—

①地域枠に関する情勢

地域枠は、全国的な問題である医師偏在・医師不足対策を主な目的として各大学・自治体で設定された枠組みです。そのため、地域医療を守るために地域医療に従事することを考えている医学生を後押しするものである必要があります。しかし、近年別枠方式への一本化¹⁵やマッチングシステムの改定など、地域枠制度の強制力が強くなり、地域偏在対策としての側面が強くなってきており、「地域医療に従事したいと考える医学生を後押しする制度」からかけ離れていくのでは、との懸念があります。また、地域枠には法的拘束力がありません¹⁶が、地域枠で入学した学生に対する道義的責任を問うべきとの意見も各都道府県等からは挙がっています。しかし高等教育機関である大学が卒後進路を特定の研修病院にのみ限定することは、職業選択の自由および大学設置基準32条(卒業の要件)から、不相当であるとも考えられます。さらに、地域枠で入学した学生に対して入学時と卒業時の契約内容変更が一方的に学生に伝えられる事例なども医学連に寄せられています。

地域枠の問題点	
#1	離脱=返金=契約破棄の道義的責任
#2	離脱希望者へのパワハラ・アカハラ・マタハラ
#3	拘束期間が長すぎる：9~12年 30歳前後まで働けない(他国だと4~5年)
#4	入学時・入学後の説明不足：従事要件についての書類がない県もある
#5	奨学金の一括返済しか認めていない (金利は10%以上、一旦借りたら抜け出せない)
#6	在学中に契約内容が勝手に変更される
#7	離脱者への罰則 県外病院へのマッチで補助金減額、専門医取得不可 地域枠生専用ID、通約金の設置
#8	入学前に、卒後の進路のことを決められる訳が無い

¹⁵ 厚労省と文科省が相談して別枠方式に一本化することが決定した。別枠方式とは、一般の入試と地域枠入試を別にして、地域枠入学生は必ず奨学金を受けるとする方法のこと。

¹⁶ 地域枠の従事義務要件は、各自治体が貸与した奨学金の返済免除に対する要件と、大学入学選抜の応募要件として課した義務履行条件(卒後進路指定・奨学金需給指定)に分類することができる。前者は各自治体と個人間の民法契約であり、返済によって従事義務は解消される一方で、後者に関しては、指定研修先や年数の不確定から有効条件を満たさないこと、憲法上の職業選択の自由及び居住移転の自由の観点に抵触することから法的拘束力は発生しないと考えられる。ゆえに、奨学金を返済した場合や奨学金を伴わない場合には、従事義務は法的には解消されると考えられる。

②医学生の声、取り組み

宮崎大学では、入学時に契約した内容と異なる従事義務内容を入学後に提示される事例がありました。大学側からは、学生がキャリアを積む上で不利益がないように努めているという意向は伝えられましたが、契約内容が変わる上で学生への説明が不十分だったことや、6年生のマッチング期間には何も説明がなかったことなどから、学生の中に不安が広がっていました。これを受けて、当初は5年生が中心となってアンケートを行い、地域枠学生の不安な声を集めようとしていましたが、学生を集めることは学生会の役割でもあるという観点から、学生会に協力要請がありました。こうして学生会が関わることで、より信頼されたアンケートとして広く学生を集めることができました。さらに、そのアンケートを元に大学側と懇談した際には学生会を通したアンケート結果として受け取ってもらうことができ、その後は説明会が開催されたり、法的拘束力がないことの説明がなされるといった成果につながりました。地域枠学生だけの問題として納めてしまうのではなく、学生の困りごとの1つとして自治会を通して要求を届けることで、個人を守りつつ不利益を訴えることができました。宮崎大学の学生は、今後も制度に学生の声が反映されるよう活動することを目指しています。

山梨大学の地域枠制度では、令和2年度入学者から（初期研修に加え）専門研修を県内の指定病院で行うこと、修学資金を返還する場合は年10%の金利を支払うことなどが定められています。それに加え、令和3年度以降の入学者には違約金が設定されるという方針が報道¹⁷によって明らかになりました。また、5年次の地域枠学生を対象に行われる個別面談などで、結婚や妊娠などライフプランの立て方を制限するような発言があり不安に思った、との声も挙がっていたことから、地域枠に関する学生を集めて適切に行動するため、学生会がアンケート調査を実施しました。質問項目は修学資金の利用状況、説明会・個別面談での説明は十分か、地域医療の学びに関する要望、違約金についてなどで、107件の回答がありました。特に違約金に関しては、報道を知らなかったり、違約金制度の詳細について明らかにされていなかったことから問題意識を持っていない学生も多かったようですが、「違約金を定めるよりも、地域で働くことの魅力を伝えられる教育のほうが必要だ」というような声も複数寄せられました。この調査によって地域医療を学ぶ上での要望なども吸い上げることができ、今後は学生会として大学側に伝える機会を作っていくとともに、学生に対するフィードバックも行う予定となっています。

③医学連の取り組み

前述の山梨大学医学部地域枠における違約金の設定に対しては、医学連としても危機感を持ち、また山梨大学の学生が動くことによって学生個人が不利益を被ることも懸念されたことから、医学連として山梨県福祉保健部医務課に「医学部地域枠に関する公開質問状¹⁸」を提出し、違約金設定に関する具体的な内容や今後の方針について聞き取りを行いました。医務課からの回答では、違約金を設定する必要性について、今年度初めて地域枠医師の義務年限違反者が2名出現したことを受け、地域医療への貢献

¹⁷ 山梨日日新聞『医学部地域枠に違約金』（2020年11月5日）

¹⁸ 医学連 HP『医学部地域枠に関する公開質問状を山梨県に提出し、回答をいただきました』
<https://www.igakuren.jp/topics/%e6%b4%bb%e5%8b%95%e5%a0%b1%e5%91%8a/750.html>

を確固たるものとするため、との理由が挙げられました。また、違約金の具体的な金額（右図参照）も明らかにされたほか、結婚や介護などの事情による離脱は認めないとの方針も示されました。

これらの回答を受け、医学連としては山梨県の地域枠制度が学生のための制度というよりも、学生を県内に縛りつける制度になってしまうのではないかと懸念を持っています。

また、今回山梨県において地域枠の契約に関し違約金が定められたことで、今後違約金の設定がほかの都道府県にも波及するという可能性も懸念しています。医学部の地域枠制度に関しては、職業選択の自由を侵害しているのではないかとといった根本的な制度の在り方に関する議論も尽くされておらず、このような事態が続いていけば、今後はさらに一方的な締め付けが強まるばかりです。医学連としては、地域枠制度を地域医療と学生の双方にとってよりよいものにするため「管理より支援を」の姿勢を持ち、今後も継続して制度の改善に関する要求を行っていきます。また、同様の事態が起こった場合に迅速な対応をするため、全国の医学生からの情報収集も引き続き行います。



第3節 学費値上げ、新修学支援制度に関する活動—学生が平等に学べる場を作ろう—

大学等修学支援法¹⁹が2019年5月に改正され、2020年度から施行されました。制度内容の変更により、これまでは支援を受けることができていた所得層の家庭の学生が支援を受けられなくなります。さらに、医学部学生で多いと言われる多浪生、留年生、再受験生、編入生が不利益を被る内容でした。また、昨年からの国立大学の学費値上げの動きも続いており、東工大、東京藝術大、千葉大、一橋大、東京医科歯科大が授業料の値上げを表明したことを踏まえて、文科省は授業料自由化の議論を始めています。医学連としては、そもそも現在の高等教育の学費は海外に比べても高く、学生の学びたい要求を実現するためには学費の引き下げが必要であると考えており、このような学費値上げの動きが今後広がっていくことを懸念しています。

2019年には、高等教育無償化プロジェクトFREEが行ったアンケート「学費・奨学金に関する実態調査」に協力しました。このアンケートは学生の学費・奨学金に関する実態を可視化するために行われ、FREEとして集めた合計枚数は8798枚で、そのうち医学連としては医学生から816枚を集めました。アンケートからは「生活費のためにアルバイトしてた友達が留年して、留年すると奨学金が止まるので、学費をさらに稼ぐためにアルバイトを過重にし、勉強ができなくなり、もう一度留年してしまった友達がいます。」「私立医学部に受かったものの、学費が払えず、退学。夢を諦めて国公立の工学部に編入した。」という切実な声が聞かれました。

¹⁹ 『大学等における修学の支援に関する法律施行規則の一部を改正する省令等の公布について(令和2年3月6日総合教育政策局長・初等中等教育局長・高等教育局長通知)』 https://www.mext.go.jp/content/20200306-mxt_gakushi01-000005496_01.pdf

このような医学生の経済的状況を改善するために、医学連では2019年11月27日に緊急声明²⁰を発表し、12月22日には記者会見を行いました。この会見には医学連役員のほかに各地の大学で学費の値下げに対して活動していた学生にも参加してもらい、メディアを通じて社会に発信しました。

最近の出来事としては、東京女子医科大学が2021年度以降の入学生について、6年間の学費を計1200万円以上値上げすることが報じられました。コロナ禍による大学病院の経営悪化の影響などが指摘されていますが、今回の値上げにより東京女子医大は全国の私立医大で2番目に学費の高い大学となります。この値上げに対しても他大学の追従が懸念されており、今後の他大学の動向についても注意深く追っていく必要があります。

①コロナ禍で浮き彫りになった学生の経済的困窮

今年度は新型コロナウイルス感染拡大により、学生の経済状況にも様々な影響がありました。家計全体の減収により学生への仕送り額が減ったり、アルバイト先が休業・廃業したことに伴って収入を得られなくなるといった状況が多くみられ、特に医学部では臨床実習などとの兼ね合いから、飲食店等でのアルバイトを禁止する大学も出てきました。また、対面での講義がライブ授業やオンデマンド等に切り替わったことで、自宅のオンライン環境を整える必要に迫られ、通信機器を新たに購入しなければならず出費が増えるなど負担の増加もみられました。

このような状況の中、全国の学生からは支援を訴える声が上がリ、4月24日には様々な立場の学生が集まって「一律学費半額を求めるアクション」として、学生への一律の支援を国に求めるという全国署名が立ち上がりました。医学連は、将来的な学費負担軽減を求める立場にあり、困窮している学生を早急に支援していく必要があるという一致点のもと、この全国署名に賛同の意思を示し、署名活動に協力しました。4月29日までに1万663筆が集まり、文部科学省に要請書とともに提出されました。医学連としても、5月2日に発表した緊急声明の冒頭で医学生の経済的状況について述べ、国や大学をはじめとする各機関に要請しました。

③継続して学費値下げ・給付型奨学金制度の充実を求めよう

奨学金利用は現在、学生の2人に1人²¹とされています。一方、世界では高等教育無償化への大きな流れがあります。日本でも免除枠や給付型奨学金の拡充が少しずつ進んできていますが、免除枠や給付型はごく一部の成績優秀な学生に限定されており、これでは施策としては不十分といえます。コロナ禍であるかどうかに関わらず、学生にはまだまだ経済的な不安が付きまとう状況であるということです。

医学連は今後も、学生負担軽減、大学予算の拡充の要求を集め、安心して医学を学べる環境づくりを整備します。そして、大学を臨床医学に限らず研究にも安心して取り組めるような場にしていきます。

²⁰ 医学連 HP 『【緊急声明】新修学支援制度と学費値上げに関する緊急声明を発表』

<https://www.igakuren.jp/topics/info/338.html>

²¹ 日本学生支援機構の学生生活調査によると、2016年で48.9%の大学生が奨学金を受給している。

第4節 医学部入試不正問題—医学部における差別、ハラスメントを絶対に無くそう—

2018年8月7日、東京医科大学の内部調査委員会は、2006年から医学部医学科の一般入試で女性受験者の得点を一律に減点していたことを明らかにしました。その後、文部科学省は複数の大学で女性や浪人生の扱い不利による入試不正が行われていたことを報告しました。

医学連では、この一連の問題に関しての医学生への率直な考えや、性別や年齢に係る不適切な面接、大学内での差別意識、背景にある労働環境に対する考えを明らかにするべく、同年12月から3月末にかけて全国の医学生を対象にアンケート調査を行いました。全国58大学の医学部から3017枚の回答が集まり、これをもとにアンケートの最終報告と提言²²を作成しました。

このアンケートでは、医学部入試の際、性別や年齢に特化した質問を受けている学生がいることが明らかになりました。ライフイベントに関わる質問をされた学生は全体の14%で、年齢に特化した質問をされた学生は全体の5%、再受験生では25%でした。「入学後に性別や年齢等を理由に嫌な思いをした経験があれば教えてください」という自由記述の質問に対しては、約200件の回答が寄せられました。「医局説明会で『女医は結婚すれば働かなくていいから楽だよ』と何度も言われた（女性・6年）」といった発言や、「解剖実習で、嫌がる女子の手を無理やり掴み、ご献体の陰茎を触らせようとした（女性・3年）」と、男子学生からのセクハラを受けている実態も明らかになりました。このことから、医療界のみならず医学を学ぶ場である大学においても、そして医学生の中にも年齢や性別による差別意識が根強く存在することが分かります。

また、医学部の中には実習や研究室のかかわりの中でいまだにアカハラ・パワハラが根強く残っているという声も寄せられています。昨年度の文科省交渉では、各大学に対して開かれた相談窓口を設置するなど適切な対処を促すよう求めました。これに対して文科省は、アカハラ・パワハラは当然あってはならないものとの認識を示したうえで、各大学の教務担当者の会議でハラスメント対策を呼び掛けていることを報告し、ハラスメントは今後も取り組んで行くべき課題だということを示しました。

医学連では、今後も寄せられた声をもとに継続して要請や発信を行い、大学や医療界における差別意識やハラスメントを一掃するよう働きかけていきます。

第5節 医学生が抱える不安と医学教育への参画—より良い医学教育の実現のために—

① 医学生が抱える学業への不安

「カリキュラムが過密でゆとりがなく大変」「急なカリキュラムの変更で混乱を招いている」など、医学教育改革に伴うカリキュラムの過密化により、多くの医学生が学業への不安を抱えています。医学連ではこれらの声を受け、医学教育改革において学生が置き去りにされているのではないかと懸念から、2017年11月から2018年3月にかけて「医学生が抱える学業への不安の実態調査」を行いました。調査の結果、約6割の学生が学業に不安を感じており、約7割の学生がカリキュラムが過密で余裕がないと感じていることが明らかになりました。また、カリキュラムが過密であると感じている学生の方が、そうでない学生に比べて学業についての不安を感じている割合が高いという結果になりました。さらに、特に合否判定や獲得目標の不明確さ、教育の手法・教員のサポートについて不満をもつ学生の

²² 医学連 HP 『【全国調査結果の最終報告と提言】入試不正に関する医学生アンケート』
<https://www.igakuren.jp/topics/info/195.html>

方が、そうでない学生に比べて不安を感じているということもわかりました。したがって、これらの原因を取り除くことで不安を感じる学生は減少するのではないかと考えられます。

この調査後も、「厳しい進級判定が不安」「成績判定基準が不明確」など、医学教育改善を求める声は医学連に届いています。安心して医学を学べる医学部にするために、医学連と各地の自治会が力をあわせて学生の声を届ける場を保障し、医学教育の改善に取り組んでいきましょう。

②学生が医学教育に参画し、より良い医師になるために魅力的な医学部を主体的に作ろう

現在、日本国内の全ての医学部では、2024年までにアメリカのECFMGによる国際認証を受けるため、WFME（世界医学教育連盟）が定めたグローバルスタンダードを満たさなければならないということで大幅なカリキュラム改革がなされています。多くの大学でこの認証評価も始まっていますが、医学連はその評価項目の中でも特に「学生の医学教育への参画」に取り組んでいます。

前述の実態調査の分析を踏まえ、医学連では2018年11月～2019年6月にかけて、全国9つの医学部において学生と教員による医学教育ワークショップを実施し、その前後で双方にアンケートを行いました。事前アンケートでは、学生は教員に対し「相談したい」「理解してほしい」という気持ちを持ちつつも、実現できていないということが明らかになりました。教員側も学生の意見を尊重したいと回答した一方で、必ずしも学生の意見を反映できているとは感じていないことがわかりました。ワークショップを行った後のアンケートでは、学生が「困ったときに教員に相談したい」と回答する割合が増え、対話を通してより教員に相談しようと思えるようになったという結果が出ました。教員側も、学生の意見を尊重したいかどうかについて「とても思う」と回答する割合が上昇しました。参加した学生・教員のほとんどが「ワークショップを通して教員と学生の相互理解が深まった」と回答し、「相互理解によって医学教育がよりよいものになると思う」と回答する割合も増えるなど、医学教育改善に向けた期待や参画へのモチベーションが高まるという結果が得られました。また、今後の課題としてより多くの人に参加してもらうこと、一度の対話で解決が難しい問題については継続して話し合っていくことなども見えてきました。この結果は、2019年の医学教育学会でも口頭演題として発表しています。

医学生の声を集め、一致する要求を見出して代弁できる組織として、学生全員が会員である学生自治会の果たす役割は大きいものであるといえます。学生自治会は全員加盟制という体制を取っているからこそ、大学側からも学生の代表として認知され、その要求がスムーズに受け入れられているのです。今後も学生からの意見を広く集め、一致する要求をまとめて伝えるという活動を着実にを行い、学生が自己効力感を感じることができるよう、結果の共有などのフィードバックにも努めていきましょう。また、カリキュラム委員会への学生の参加が形式だけのものにならないよう、学生の声を委員会の場に持っていき、それがカリキュラムに反映されるような環境づくりを進めていきましょう。

第6節 医師の過重労働—医療者自身の命と国民の健康を守るために—

医療現場では、以前から過酷な労働環境の中で医療者の命が危険にさらされてきました。医師の過重労働を引き起こしている原因として医師の労働者としての権利が守られていない現状があります。このような医師の労働環境では、患者さん、国民のために最善の医療を行うことはできません。

2019年3月、医師の働き方改革に関する検討会において、2024年度から医師に適用する残業時間規制の内容が明らかにされました。具体的には、「医師の時間外労働上限」を適用し、原則として年間960時間以下とすること、ただし、「3次救急病院」や「年間に救急車1000台以上を受け入れる2次救急病院」など地域医療確保に欠かせない機能を持つ医療機関で、労働時間短縮等に限界がある場合には、期限付きで医師の時間外労働を年間1860時間以下までとすること、研修医など短期間で集中的に症例経験を積む必要がある場合には、時間外労働を年間1860時間以下までとすること、2024年4月までは5年間、全医療機関で「労務管理の徹底」「労働時間の短縮」を進めることなどが示されました。この方針では、脳・心臓疾患の労災認定基準における時間外労働の水準である80時間/月を大きく超えています。また、2019年度に医学連が全国の医学生を対象に行ったアンケート調査では、2千人以上の回答があり、そのうち68.7%が将来の自身の働き方について不安を感じています。現行案では、医師の健康が大きく損なわれてしまうリスクが大きく、将来医師になる私たち医学生としても看過することはできません。医師の健康が担保されなければ、国民に対して安全で質の高い医療を提供することも保障できず、医師のみならず患者さんの健康を守ることもままなりません。地域医療も一部の医師個人の努力に依存するような体制では、崩壊する危険性があるのではないかと懸念します。



第7節 学生の一一致する要求を伝える活動—医学教育や施設を充実させよう—

多くの学生から、図書館の充実や自習室の設置など、学習・生活環境の向上を求める声も多く挙がっています。また、全国の医学部で大量留年が問題視されていますが、留年したあとのフォローアップは十分とは言えない状況にあります。

弘前大学では、学習媒体のデジタル化に伴い、授業で使う電子媒体の充電をするためのコンセントを講義室の座席に設置してほしいという要求が自治会のアンケートに寄せられました。このことについて懇談で大学側に伝えたところ、予算などの関係から各座席にコンセントを設置するのは難しいとの回答でした。しかしながら、講義資料を電子媒体で提供している科目もあり、電子機器の充電の消耗が激しいという事実を自治会役員から改めて説明し、協議の結果、全座席とはいかないものの講義室の充電用コンセントを増設してもらえることになりました。

近畿大学では、以前から6年生の自習室が寒いということで、暖房設備が欲しいという意見が多く寄せられていました。自習室が連絡通路に面していることに加え、設置されているエアコンの調子が悪く、冬場はとて寒くなってしまうという状況でした。これに対して、学生連絡会は学校側に新たな暖房設備の導入を求めましたが、エアコンがついていることから、これ以上お金は出せないとの返答が来ました。しかし、その後も学生連絡会として暖房設備の導入を何度も呼びかけ続けた結果、同窓会を動かすまでに至り、新しい暖房設備の設置が実現できました。

大学施設や医学教育上の問題は、「学生生活の主体者である学生の要求を伝える」という自治活動の働きによって、大学にも認識され、改善につながっています。これまでなかなか改善されず、変えることは不可能だと思われていたような問題でも、実際には教員側が問題に気づいていないだけだったり、

予算がないなどの理由から長年にわたって放置されているという場合もあります。このような問題については、自治会が学生の代表として懇談の場で意見を伝え、双方の事情をすり合わせてお互いにアイデアを出し合うことで、上記のように解決に向かう場合も少なくありません。自治会として、こうした学生の困りごとを愚痴で終わらせることなく、学生の一致する要求としてまとめることで、改善につなげていきましょう。

第8節 初のオンライン医ゼミ成功へ—学生の学びたい要求実現を絶やさないために—

①全国医学生ゼミナールの成功のために

全国医学生ゼミナール（以下、医ゼミ）は多くの医学生の「より良い医師になりたい、そのために自主的に学びたい」という思いからスタートしました。

「より良い医師になりたい」「自分の興味あることを自由に学びたい」という医学生の要求を実現することも、学生自治会の大切な役割です。そのため、学生自治会の連合体である医学連は、医ゼミを主催し、その開催に責任を持っています。

近年の医ゼミには、全国の医学生だけでなく、看護学生、薬学生など幅広い専攻の医療系学生が集まります。自らテーマを設定して学び、仲間と意見を交わし合うことで、より良い医療・社会を作り上げていく原動力につながります。全国のさまざまな大学・学部の学生との交流を通じて、「視野が広がる」「全国に信頼しあえる仲間ができる」「主体的になり、仲間とともに成長できる」などの声が毎年聞かれます。

②自主ゼミナール活動と自治会を共に発展させよう

医ゼミは単なるサークル活動ではなく、医学生全体の「学びたい」という要求や、開催大学における「自大学で学び交流する場を作りたい」という思いを集約した学術交流企画です。これまでの医ゼミの多くは、開催大学の全医学生の要求実現の場として医ゼミを開催するため、医療系サークルではなく自治会が主管を務めています。

過去には、医ゼミを開くことで自治会が発展してきた歴史のある大学も存在します。宮崎大学では60宮崎医ゼミの主管運動において、宮崎大学学生会のメンバーと医学連が「なぜ自治会が医ゼミの主管を行うのか」について深く議論してきたという過程があります。さらに医ゼミ開催後、宮崎の現地実行委員会や自治会交流集会 in 宮崎に参加した学生が中心となって学生会に合流し、医ゼミの前後で学生会執行委員が8人から25人に増えました。それにより活動の幅が広がり、1年後には学生大会を開くまでに至りました。

③第63回群馬医ゼミはオンラインで開催

昨年は2月ごろから徐々に新型コロナウイルスの感染が拡大していき、3月に予定されていた第2回全国準備委員会（2準委）は中止を余儀なくされました²³。その後も緊急事態宣言が発出されるなど、全国の学生が東京に集まれるような状況ではなくなり、毎年4月に行われるスプリング医ゼミも中止と

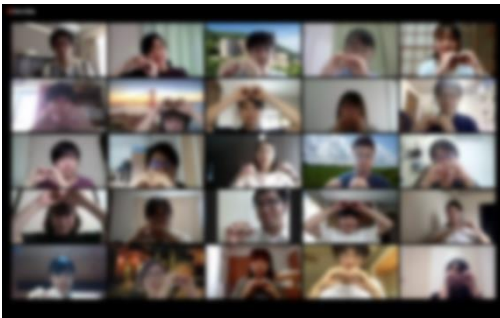
²³ これまで学習してきた内容について動画で共有した。

（全国医学生ゼミナール HP<https://www.izemi.com/news/general/2020/03/post-231.html>）

なりました。それでも、全国の学生と共に学べる機会を守ろうと、全国実行委員会としてオンラインでの企画作りを模索し、5月10日には初めて第3回全国準備委員会（3準委）をオンラインで開催するに至りました。当日は100人を超える参加があり、活動自粛が続く中で学ぶ機会を失っていた学生同士が大いに交流できる機会となりました。

夏の本番については、現地である群馬で開催したいという希望を持ちながらも感染拡大の状況は続き、中止かオンライン開催かという選択を迫られることとなりました。医ゼミの魅力として全国の学生と直接顔を合わせてのディスカッションや交流が真っ先に挙げられることもあり、全国実行委員会の議論の中では「オンラインでは医ゼミの良さが失われてしまうのではないか」という意見も上がりました。しかしながら、3準委参加者からは前向きな意見が多く寄せられ、オンライン開催への期待感も感じられました。何より、これまで62回にわたって続いてきた医ゼミを絶やしたくないという思いから、第63回群馬医ゼミの本番をオンラインで開催することを決めました。

本番の日程は、様々な要素を考慮して9月に延期し、3日間で行うこととなりましたが、8月にも本番に盛り込みきれない企画をしようということで「医ゼミ夏祭り」を開催しました。全国からはオムニバス企画として各地のサークルの活動報告があり、対面での活動が難しい中でも学習を進めていたり、新しい医ゼミサークルが生まれたことが報告され、今後の活動のより一層の活力となりました。また、これまでの全国での学習をまとめた発表も行われ、ディスカッションで学びを深めたり、オンラインでの交流が盛り上がりたりと、本番に向かう盛り上がりが見られました。



9月20日～22日に行われた医ゼミ本番には、全国から325名が参加し、学びや交流を深めました。メインテーマは「知る、想う、共に生きる社会 “コロナ”の中で振り返って考える」。世界中で起こっている様々な差別や、新型コロナウイルス感染拡大によって浮き彫りになった社会問題などの切り口から、「他者を理解する」ことについて考えました。また、中村哲先生追悼企画「足跡をたどり、次の一歩へ」の学生発表も行われ、2019年12月に凶弾に倒れた中村哲先生の活動や思想から学び、自分たちにはどんなことができるか、日本の平和主義のあるべき姿についても議論しました。さらに、63群馬医ゼミはオンライン開催ということもあり、企画中には様々な工夫がみられました。オンラインツールは「zoom」と「Remo」の2つを利用し、それぞれの利点を生かすことで、例年と変わらずオープニング動画を全員で見たり、班ごとのSGDも行うことができました。休憩時間には、各地方の学生が自らの地域で自慢の食べ物を紹介する「ご当地グルメ企画」や、お題に沿った回答を参加者から募集する「医ゼミ大喜利」など、家に居ながらにして医ゼミの開催地に出向いたような感覚や医ゼミの雰囲気を感じるような企画を行いました。どの休憩時間の企画もラジオ形式で自由参加とし、オンラインでの体の疲れを癒すことができるように工夫されていました。企画終了後の交流会でも、オンライン上で楽しめるワードビンゴやクイズ大会といったレクリエーションが用意されており、地域や学科・専攻、学年を問わず参加しやすく、大いに盛り上がりました。

参加した学生や企画後の感想文からは、「全国の素敵な仲間と出会えた」「医ゼミは初参加だったが参加してよかったと思った」などの声が寄せられ、このような状況下でも医ゼミを開催したことの意義が表れていたように思います。さらに「オンラインだったので参加のハードルが低かった」「オンライン

でここまで楽しめるとは思わなかった」などの感想もあり、オンライン企画のさらなる可能性を感じることもできました。その後も大人数で集まることのできない状況が続いていますが、63 医ゼミで培ったノウハウを生かしながら、今後もオンラインでの企画作りを工夫していきたいと思えます。

④第 64 回信州医ゼミを成功させよう

今年で 64 回目を迎える医ゼミは、歴史と伝統を脈々と受け継ぎ発展を続けてきました。現在でも学生の手だけで運営している学術文化企画としては国内で最大規模のものです。医学連では医学生の学ぶ要求を実現するために、医ゼミの開催に責任を持つ立場として「自主ゼミナール」の場を提供しています。

今年は 7 年ぶり 7 回目の信州大学での医ゼミ開催が決定しました。信州大学では、信州大学医学部医学科学学生会が規約に基づいて活動しており、学生自治組織としての役割を果たしています。今年度行われた学生大会では、信州医ゼミ開催および医ゼミ開催が決定した際の主管を学生会が担うことが承認されました。学生会が医ゼミの主管を担うことで、一部の学生だけではなく、より多くの学生の要求を医ゼミに還元・実現できると考えています。

医ゼミは過去に 63 回行われており、社会の様々な変遷と共にその時々合った形に変化してきました。去年の 63 群馬は新型コロナウイルスの流行により初のオンライン開催となりましたが、それによって全国各地からの学生の参加が容易になり全国に学びの輪が広がったと感じます。その一方で、対面で行う医ゼミの良さも痛感しました。64 信州をどのような形式で開催するかは今後の状況次第になりますが、63 群馬でのオンライン開催の経験を活かした医ゼミにしたいと考えています。

【第 3 章 自治会活動、医学連の活動の発展のために】

ここまで、学生自治会や医学連の魅力・意義と、現在医学生が抱えている要求、その実現のための取り組みを確認してきました。この章ではそれらを受けて、学生自治会や医学連の活動を発展させていくための実践や、今後の展望について述べていきます。

第 1 節 自治会活動の発展に向けて

自治会活動を活発にしてこそ、要求実現の推進力が強まり、私たちの願いが実現することにつながります。自治会活動を発展させていくための取り組みは、毎年継続している活動を絶やさず行っていくことと、学生の願いに基づいた新しい活動に取り組むことの 2 つの側面で考えることができます。

①アンケートなどで声を集める活動が学生自治の出発点になる

香川大学医学部学生会では、毎年学生からの要求を集めるためにアンケートを行っています。今年度からは Google フォームでの実施としましたが、回答率は 7 割と非常に高く、学生全体の声を広く集められているといえます。回答数を増やすため、「原則全員回答」と明記し、目安となる回答時間を記載したり、学生に回答してもらいやすいと考えられる時間帯（平日の 10 時～12 時）に流すなどの工夫をしています。香川大学は医学連から回収をお願いしている医学連アンケートの回収率もとてもよく、今年度のコロナアンケートでも全国で最も回答数の多い大学となりました。医学連アンケートにより

多くの回答を届けることで、要求が全国的な課題として取り上げられやすくなり、その大学の学生に還元される可能性も高まります。学生全体の要求を的確にとらえ、実現可能性を高めるためにも、アンケートでできるだけ多くの回答を集められるように工夫することは非常に大切です。

大学側に要望を伝えるだけでなく、それに対する回答や成果についてフィードバックを行うことで、「自分も自治や医学教育に参画しているんだ」と気づいてもらうことも重要です。弘前大学医学部学生自治会では「M.I.C.²⁴広報」を定期的に発行し、アンケートの結果や教授懇談で伝えた内容とそれに対する回答などを掲載しています。ほかにも宮崎大学学生会では学生会新聞「ひぼまえ」を、信州大学学生会では「学生会のおたより」を定期的に発行し、活動を学内に広める活動を積極的に行っています。自治会が学生の要求実現に向けて取り組んでいる組織だと認知されることで、より意見が集まりやすくなり、学生の総意を大学側に伝えることができる、というように、正の循環が生まれていくのです。

②自治会活動のやりがい、悩みを交流しよう

各大学の自治会が毎年行っている活動は、他大学の学生自治会と交流することで、自大学の中では気づけないその重要性に気づくことができます。また、医学連役員との交流の中で、全国的な課題の解決へとつながることもあります。

▼自治会懇談～各大学の課題を全国へ～



香川大学自治会懇談 (2020.12.6)

昨年12月には、自治会懇談で医学連役員が香川大学の自治会役員の方と交流し、医学連の活動や自治会の取り組みなどについて意見を交換しました。訪問した医学連役員は高知大学と島根大学の自治会に所属しており、3大学の自治会活動を比較しながら交流することができました。さらに、懇談の中で医学連の活動のひとつである省庁交渉に興味を持ってもらったことで、香川大学から2名の学生が年末の省庁交渉に参加しました。医学連役員だけでなく全国の医学生が省庁交渉に参加でき、多く

の学生の声を国に届ける良い機会になりました。

▼自治会交流集会～各地の自治会活動の力に～

医学連は、自治会交流集会を年に数回開き全国の自治会の情報共有や交流の場を作っています。自治会同士がお互いの活動を報告しあうことで「自分の大学でもやってみよう」と自分たちの自治活動のモチベーションがあがったり、お互いの活動の悩みを相談することで「自分たちと同じ悩みを持っている自治会と話せて安心した」「ほかの大学での成功体験を聞いて解決していく糸口が見つけられた」と、自分たちの活動と他大学の活動を照らし合わせて情報共有できたりします。

例年は全国各地で開催する企画ですが、今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、オンラインでの開催となりました。全国から32名の参加があり、活発な意見交換ができました。自治会取り組み紹介では、全国各地で自治活動をしている大学の代表者に各地の活動内容や大学の様子を発表していただきました。今年度は特に、対面でのミーティングなどが行えないこともあって活動が行き詰まっている自治会もあるような状況だったので、他大学の活動報告を聞くことで新たな発見ができ、活動の方向性が見えたり、自治活動の楽しさを再認識できたりしたのではないのでしょうか。企画毎のSGDで

²⁴ M.I.C.とは Medical Information Committee の略で弘前大学医学部学生自治会の通称

は、参加者が抱える自治活動をする中での悩みや大学内での学生の不安・不満をどう解決するか、今の状況下での自治活動をどう進めていくかなどを共有し、時間が足りなくなるほどの活発な意見交換をすることができました。

第2節 サークル活動、学園祭、学習会、新歓など学生の自主的活動を活発に

①サークル活動の発展、新歓、学園祭や医学展の成功を

サークル活動や学園祭など、学生の自主的な活動が活発に行える環境を整えることも自治活動の重要な課題です。このような活動は、学生同士が結びつき人間関係を築いていくことにもつながります。また、将来医師になったときに大切な社会性や主体性を身につけることもできます。学生自治会がサークル予算を決定したり、学園祭の運営に関わったりしている大学も多くあります。

今年度は、新歓の時期から外出自粛が求められており大規模な勧誘活動が行えなかったり、学園祭もほとんどの大学で中止されるなど、学生による自主的な活動が著しく制限されました。このような活動が行えないことで、学生同士のつながりは希薄になり、今後の活動の継続が難しくなる可能性もあります。今年度は準備期間が不十分であったり、感染拡大の状況下にあって開催を見送ったところがほとんどであったと思いますが、来年度に向けては開催形式の見直しや感染対策についての議論・準備を行う猶予があります。学生からの求めに応じて、これらの活動方針を決めるため先頭に立って話を進めることも、自治会としてできることのひとつではないでしょうか。

②新入生歓迎の取り組みの成功を

新入生歓迎の取り組みは、期待と不安をもって大学に入学してくる新入生に対して学生生活のスタートをサポートするものであり、人間関係作りの基盤にもなります。また上級生にとっても、新入生を迎えて人員確保をするという意味合いはもちろんのこと、自分たちの成長においても良い刺激となるものです。

今年度は、4月ごろから大学内での集まりやサークル活動ができなくなってしまったところが多く、例年通りの新歓活動が行えなかった影響で、入学から数か月たっても部活やサークルに所属できない新入生が続出しました。医学連が行ったアンケート²⁵でも、9月時点で新入生の58%が未所属であるとの結果が出ています。

弘前大学医学部学生自治会では、例年4月に行われる大勧誘会（新入生向けに医学部の部活・サークルを紹介する企画）が中止になることを受け、いち早くその代替案の検討に取り組みました。各部活に対しても説明や呼びかけを行い、学友会と合同でYouTube ライブを用いたオンライン大勧誘会を開催することができました。企画中は各部活が制作した動画を流すなどして活動を紹介し、コメントによる新入生からの質問を受け付けて在校生が回答するなど、進行もスムーズに行われました。終了後には事後アンケートも実施し、新入生の9割以上が「部活選びに役立った」と回答するなど高い満足度であったのに加えて、在校生からも「勧誘ができず困っていたが、このような機会を作ってくださり本当にありがたかった」など感謝の声が寄せられ、双方にとって実りのある企画となりました。

²⁵ 医学連 HP『医学生の声が届ける！コロナ時代の意識と生活の実態調査<第1回>分析速報』

<https://www.igakuren.jp/igakuseidata/2020/10/702.html>

また、新入生には学生自治会への参加を呼びかける働きかけも大切です。学生自治会の役割や成果などをわかりやすく伝えクラス委員などの役員の確立を図りましょう。新入生を迎え入れることは学生自治会の発展や存続のためにとっても重要なことです。各大学の新歓の取り組みを交流し、全国的に活動を盛り上げていきましょう。

医学連は毎年「医学連新聞」新歓特別号を発行しており、新入生に自治の重要性や魅力を伝える内容となっています。新入生を自治会活動へ迎えるためにぜひ役立ててください。

第3節 自治会の建設・医学連加盟を進め、多くの医学生の要求を実現しよう

①医学連加盟後の近畿大学の発展

37大会から始まった第37期医学連は、近畿大学を新たな加盟校として迎えて始まった画期的な年でした。近畿大学は、私立大学として初の加盟校となったことで全国の自治会に希望を与えており、「医学連に加盟したい」という声が広がっています。

この1年間は、新型コロナウイルスの影響を全国の大学が受け、自治活動が困難な場面もたくさんありました。近畿大学学生連絡会（以下、近大学連）もコロナ禍の影響で4月からの学内での活動は休止を余儀なくされていました。しかし、そうした困難な中でも、春には質問箱やzoom会を開いて1年生へのサポートを行いました。また、学費の一部返還を求めるアンケートなどを全学生に行い、学生の声をまとめて大学側に提出し、大学から正式に回答を受け取ることができました。そうした取り組みの中で、近畿大学が全学生への緊急給付金5万円給付、無利子奨学金の創設を実現するなど、学生への経済的支援に成果を上げています。

後期には、オンライン上での学生アンケートをもとにオンデマンド形式の学生大会を12月に実施することができました。決議案を説明する動画を作成し、近大学連役員の呼びかけで500人以上の学生がGoogleフォームでの採決に参加しました。決議では、学生の要望が多数取り上げられ、学生の困りごとの一つ一つ取り組んでいます。その後、大学の教職員との懇談の場であるキャンパスミーティングが今年度も開催され（3年連続）、決議の内容について話し合うことができました。特に、「過去問とその解説の公開」「実習着の変更（白衣や色指定など）」「5年次における病院見学の日程確保」について重点的に取り上げ、学生が要求する理由や他大学の事例を取り上げて具体的に説明することができました。その結果、過去問については公開できる見通しとなり、また実習着についても前向きに検討していくという成果が得られました。今回得られた回答を、今後は学生へフィードバックしつつ、必要な項目は実現のために継続的に交渉していく予定です。

困難の中でも、近畿大学では学生の要求を取り上げ実現するための懸命な活動が続けられ、加盟校としての発展の勢いは止まっています。今後は、現在の近大学連の活動を安定的なものにしていくとともに、役員を継続して確保できる体制づくりが目標となります。他大学の勧誘方法も参考にしながら、低学年から自治活動に巻き込めるよう取り組みを進めていきます。

こうした中で、近大学連の学生からは「医学連に加盟してよかった」という声が広がっています。加盟校の学生・中執役員に相談できることや、他大学の事例を紹介してもらえること、いろいろな方法・アイデアを共有してもらえること、そして何より励まし合って自治活動をできる仲間になれること、これらが近畿大学の自治活動にとって今後の発展を支える大きな力となっています。この1年間は加盟校としての魅力が大いに際立った1年となりました。

また、医学連としても、私立大学特有の要求である「学費を下げしてほしい」「休日の授業を見直してほしい」など、これまで以上に幅広い学生の要求が届き、活動の幅を広げることが可能となっています。同時に、他の医学連加盟校にとっても、自大学の自治活動を発展させる上で、キャンパスミーティングをはじめとする近畿大学の取り組みはとても参考になります。近畿大学の活動は、今後も全国の学生に大きな影響を与え、医学連の運動を発展させる可能性を持つこととなります。

②新しい自治会の立ち上げ、民主的で継続的な活動、自治の必要性が全国に広がっている

この1年間で、新しく自治会が立ち上げようとする動き、民主的な運営を目指して活動を広げている大学が出てきています。

秋田大学では、コロナ禍で学生の要望を大学側に伝え、学生の声を聞く大学づくりをしたいという学生が立ちあがりました。大学とのやり取りの中で、学生一人だけでは答えてもらえない事例や、移動制限やアルバイト制限などの大学側の対応方法に不満の声が上がっていることなどから、学生の声を集め、実現する組織として自治会の建設を目指すことになりました。今後は学年代表などを中心に学生自治会作りを進めようとしています。例年行っている新入生歓迎行事や大学祭の運営なども引継ぎがあいまいで、自治会を作って学生の自主的な活動をもっと盛り上がるものにしようとしています。

奈良県立医科大学では、コロナ禍で経済的に苦しい状況に陥った学生のために、学生支援給付金の実現に向けて活動が起こり、次第に学生の要望をもっと幅広く実現する動きへと広がりました。病院実習や図書館の利用、傘立ての設置など学生の学修・生活環境改善を求めて要望書を作り、キャンパスミーティングにて教職員と話し合うことができました。現在は、医学科と看護学科の総代（学年代表）を中心に活動しており、今後は自治会の組織作りに挑戦していきます。

国際医療福祉大学は、新設の医学部として今年で4年目になります。医学科に加え、6つの学科と合同で学生会を構成しています。特色あるカリキュラムを掲げている一方で、サークルが少ない、グラウンドが狭い、学食がないなど新設校ならではの課題が明らかとなっています。歴史が短く、また、中心学年の入れ替わりも早く引継ぎが難しいことから、学生会として取り組む課題を設定するところから始めています。それでもこの数年間、医学連との交流を深めてきた中で、さまざまな大学の自治活動を参考にしながら進んできています。現在は、アンケートを作成し、学生の要望を集めることや、スケジュールが異なる中でも学生会委員が定期的に話す機会を設けること、広報を積極的に行って学生への認知度を高めることなど、学生会の機能化に取り組んでいます。今後、学生会の継続的な体制をつくりながら、規約や大学側との交渉など自治会としての立場も確立することを目標にしています。

鹿児島大学では、この数年間、自治会の再建に向けて取り組んでいます。2019年度より学生の有志が自治会活動の復活を目指して、桜ヶ丘学生会（仮）を立ち上げました。2020年度7月に実施したアンケートでは220件の回答があり、コロナ禍における学生たちの不安を大学に届けることができました。その他、病院見学に関する学生の要望をまとめて提出するなどの活動も行いました。このような活動を通して学生会の認知度が年々広がっていく中で、今後は一緒に自治会再建をしてくれる学生を集めることを目標にしています。

③実際に加盟に向けて取り組もう

岡山大学では、2013年度から医療教育学生会が医学科分局を中心として、学生が主体となって学習環境をより良くする自治会の取り組みを進めています。2018年度の岡山での自治会交流集会をきっかけに、岡山大学で要求が高まっている「試験の問題と答案の開示」について医学連加盟校との交流が深まり、学生から自治会の必要性や「医学連に加盟したい」という声が上がりました。医学科分局では、学生アンケートの実施や学生総会の開催しながら学生の要求実現のために活動しています。また、この2年間医学連への加盟を目標に取り組んできました。ともに加盟にむけて取り組んできた岡山大学の学生からは「自治って面白い、もっと知りたい」「医学連の企画に参加し交流の場を持ちたい」「試験の問題・回答開示に取り組んでいる自治会の活動を知りたい」などの声が聞かれていました。3月の懇談では加盟の条件（規約、学生からの承認、加盟分担金）について改めて確認し、岡山大学学生会の安定的な継続と今後の発展を見据えて、39大会での医学連加盟を目指すとの方向で一致しました。医学連は、すべての医学生に開かれた組織として岡山大学の医学教育学生会の皆さんと繋がり続け、継続的に懇談するとともに、岡山大学内での自治の発展のためにも取り組んでいきます。

近畿大学の加盟や岡山大学の加盟を目指す運動は、医学連の存在意義を捉えなおし発展方向を展望する契機となっています。医学連は、「全医学生の利益を守ること」を理念として掲げており、これまでも、自治会が加盟している・いないに関わらず、全ての大学とのつながりを模索し、要求を集めようとしてきました。そして今、近畿大学だけではなく、この数年の間に自治活動の活発化が全国で見られています。医学生の声を集め、届ける全国で唯一のナショナルセンターとしての役割を、医学連が発揮していく大きなチャンスです。

この役割を担う医学連を、さらに大きく幅広い存在にしていくことが、運動を発展させること、ひいては要求実現へと結びつきます。医学連を大きくする方法の一つが、各地で活動している医学生・自治会組織の「加盟」です。また、加盟することは全国的な発展があるだけでなく、各大学の活動を元気づけるものともなります。一人ひとりの学生のちょっとした「困った」「変えてほしい」という要求を丁寧に解決していく草の根の活動が、「加盟」を経て守られ、より充実させることができます。このように、全国の運動と各大学での取り組み一つ一つは、相互作用を生み出して発展していくのです。

今後一人ひとりの学生、未加盟校にも自治活動を広げ発展させ、さらなる加盟に向けて呼びかけていきましょう。

おわりに

学生自治会・医学連では、「自分の大学をより良くしたい」「より良い環境で学びたい」「自分たちの受ける医学教育・卒後研修や労働環境について考えたい」といった医学生の要求を実現することを目指して様々な活動を行っています。それらの医学生の要求を実現することは、「より良い医師になってほしい」「安心してより良い医療を受けたい」という国民・患者さんの願いにも結びついてきます。こうした国民・患者さんの求める「より良い医師」を目指すためにも、一人ひとりが力を合わせ、少しずつ要求実現を進めながら学びがいのある医学部を作っていきたいものです。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により自治会の活動も様々な場面で制限され、活動が停滞してしまっているところもあると思います。自分の大学の自治会だけでは活動の方向性が見えない、というときには、ぜひ医学連や全国各地の自治会を頼りにしてください。オンラインツールを上手に活用してミーティングを行ったり、新歓や学生大会といった企画を開催できている自治会の取り組みは非常に参考になります。また、大学に訴えるだけでは解決できないような全国的な課題があれば、医学連がその声を集めて関係諸機関と交渉したり、メディアを通じて社会に発信していきます。さらに、この逆境の中だからこそ学生自治の必要性を感じ、新たに自治会を立ち上げようとする仲間も増えてきています。学生がより多くの悩みを抱える状況下だからこそ、全国の仲間と力を合わせて各地の自治活動を盛り上げ、よりよい学生生活の実現のために一緒に取り組んでいきましょう。

全体討論

島根大学 代議員：今回の決議案を読んで感じたこと。島根は入学したときから自治会が活発に活動していて、自分はそれが当たり前だと思っていた。しかし、決議案を読んで、大学によっては自治会が無かったり、活動ができていないところ、もっと活発に活動しているところがあるということ学んだ。先輩たちから学んでもっと成長していければいいなと思います。

山梨大学 役員：今回の医学連大会に信州大の上級生だけでなく、1年生や下級生がたくさん参加してくれていたの、医ゼミに向けてもっともりあげてサポートしていけたらいいなと思います。

信州大学 役員：37期役員を務めています。伴先生のお話の中でコロナと医学教育という話がありました。今年の一年生に関しては情報共有が煩雑だったり、課題が多かったり、締め切りが直前に変わった、変わることが多かった年であった。

信州大学でも後輩の話を聞いているとほんとにそうで、バタバタしていた一年だった。

上級生も実習の制限や、外病院に行けるか、部活などまだまだあると思う。各大学の自治会が状況を把握しながら求めていることが何で先生たちと密に連携取れることが大事だと感じた1年間だった。

来年も医学連としてもそれぞれの大学と連絡をとって活動していきたい。

信州大学 オブザーバー：信州で医ゼミ行われることになって、昨日も信大が発表させてもらった。なんか信州は強い、すごいみたいな意見をもらえたのが嬉しかったです。ぜひ医学連で関わってきた人も、医ゼミに来て見てくれたらいいなと思います。医ゼミの自治会発表のところではいっぱい発表してください。6年生が一人だけなのでお祝いしてください。ありがとうございます。

議長：対面の場ですと、1年の感想とか抱負などを語ることも多い。初参加者や下級生の皆さんも積極的に発言してもらえたら。

弘前大学 役員：今年1年間はすごくいろんなシステムが半強制的に変わった。学生の要求が出て来た年だったんじゃないかと思う。自分自身も実習で対面でできたところ、オンラインでできて良かったところが見えて来た。選択肢も広がってきた面があるので、学生のニーズを吸い上げて、今までの概念にとらわれずに変えていけたら良いと思う。

例えば、医ゼミでは春のスプリング医ゼミに向けて盛り上がるっていうのがあるので、自治会交流集會も、4-5月の早い段階でできたらいいなと、医学連の活動に関しても今年得たノウハウも生かしてやって行けたらいいなと思います。

弘前大学 役員：37期医学連の委員長を務めさせてもらった。私の任期も今日で最後。この1年はコロナ拡大の影響で、医学連としても大きな影響を受けた。医学連大会の直前3月で流行拡大し始めて、大会出来ないんじゃないかということで延期した。37期が実質的には、そのときからだ、流行が拡大し始めて、大会が延期になった。

色々な大学で問題が起こっている中で、様々な動きがあった。医学連役員も自分の大学の自治会、勉強も目まぐるしく変わる中で大変だったが、全国の声がたくさん届いている中で、信念をもって動いてくれたのが本当に良かったと思う。

医学連役員も、自治会や、自分の勉強面も変わっていく中で、医学生のために信念をもって頑張ってくれた。私が中心となって決議案を作成した。長くなって、本当に色々なことをやってきたと実感した。今年、コロナの影響で困っているという声に対しては、やれることはやろうと精一杯動いてきたつもり、それでも私たちがやってきたことは十分だったのかと思うことも、拾いきれていないと思うこともある。この状況はここで終わるものではないと思うので今後も困ったら医学連に助けを求めてほしいと思うし、自治会と一緒にやっていきたい。まだ時間があるので、もし医学連との活動の中でこんな活動ができたということがあったら聞きたいです。

高知大学 代議員：決議案を読んだのと、今日昨日の参加の中で、医学連がバックにいる、何か問題があったときに医学連がサポートしてくれるということがすごく心強い。SGDでもうちの大学はこんなことあるよ、という高橋が、医学連でできるかもねって言うってくれる。それは心強く思う。大学ではなんとかならないと思うことでも医学連と一緒にならなんとかなるかもしれないと思える。私も中央執行委員に立候補するから、そのようなことができるようになりたい。

群馬大学 役員：地域枠のこと。昨日もシンポジウムの方で色々話させていただきましたし、決議案の方にはもっと詳しく書いてあるので。問題って色々あると思っていて、他の大学にも、これからも出てくるかもしれないし、ぜひぜひ情報を下さい。情報共有をしていって、みんなでこの問題に取り組んでいけばいいのかなと思っている。昨日はそのスタートになった。昨日は地域枠の問題点ばかりを話してしまった。自分も地域枠だし、他にも地域枠の学生はたくさんいる。地域枠を良く思っている学生も多いし、むしろ、その中に入って地元の医療を支えようと頑張っている人もいると思う、そうした人に

向かって地域枠やばいからという誤解されてしまう。良いところは伸ばしていく、問題点は改善していく。制度としていいものを作るところを目指したい。学生の中での分断は見たくないし、医療を作る人は患者さんのためにということを考えてみんな動いている。ゴールは一緒。みんなで頑張っていきたい。

近畿大学 代議員：ご挨拶させていただきたい。近畿大学の来年会長を務めます。決議案でも上げてもらったように去年から加盟してやっているが、私立大学はまだ僕らだけで、他の大学にも加盟してもらえるように、自分たちも実績を内外に伝えていきたい。学内での活動がしっかり伝わっていないことがあるので、医学連と自治会の活動をしっかり伝えていきたい。

信州大学 オブザーバー：昨日今日とやってきて、各大学の自治会に有効なことはたくさんあったが、医学連の活動を支える動きがあまり無いと思った。医学連は各大学の自治会をサポートしているが、逆に各大学から医学連を支える動きがないかな～と思って。うちの大学にも医学連の役員はいるが、後継者が不足している話を聞いたり、忙しそうにしている。各大学、そういう何かしらできる形で協力していけたらと思います。何かあれば協力できるのでご連絡ください

弘前大学 役員：ありがとうございます。今年に関しては、各大学の自治会が困っている状況が強かったと思っている。逆に医学連としては引き継いできた活動のノウハウを使おうということで、医学連が自治会をサポートするという構図が多かった。私たちとしては自治会をサポートしてもらうという視点では動いていなかったが、思い返してみると、他の大学の自治会と懇談する中で得られた情報があったり、新しく問題点が発見できたりして、支えられている事も感じる。そう言ってもらえることはすごくありがたい。自治会から医学連を支えてもらうということも一つの視点として協力してもらえたら。

島根大学 役員：自治会懇談について。香川と愛媛大学に懇談に行った。できる限り対話することで問題を教えてもらえるということもあると思うので、いろんな全国の大学とつながるということは今後も重要視していきたい。

信州大学 役員：先ほど自治会から医学連を支えると言ってもらって、とても嬉しいと思っていた。医学連は、ここにいる皆が作っているものだと思う。各地の自治会があって、一人ひとりが作っているものが医学連で、医学連が一人ひとりの学生の想いを実現するために汗をかく形になっている。井伊からも、私立大学に手を伸ばしたいという話だったが医学連に加盟していない大学にもアプローチしていきたい。来年度以降も皆さん1人1人の力をお借りして医学連として動いていけたらと思う。

信州大学 代議員：僕はこの1年間医学連の書記局として関わらせてもらった。正直右も左もわからない状態。医ゼミを作る側に回りたかったところ、伊東から書記局を勧められた。最初は、医学連の全国の自治会の中央組織としての働きとか活動は正直なところ興味がない状態だった（という語弊がある）が、1年間皆さんの活動見ている中やアンケートに自分もかかわる中で、自分

が誰かのためや他の医学生のためになる場があるということが自分にとっては大きな収穫だったと思う。

医ゼミも信州で開催が決まって、現地の代表もさせてもらう。まだまだどんな医ゼミを作って以下ということもはっきりしていないが、皆さんと一緒に学びたいという要求を実現できる場を作っていきたいと思います。

香川大学 代議員：去年も思ったが、他の大学のことを知ることで新たな視点になる。今年もたくさんいろんなことが聞けて、来年以降の参考にしていきたい。2年連続で発表させてもらって、参考になることがあれば、参考にさせていただいて、またお願いします。来年には集まってやりたいところですね。実際に会ってみないと分からないことがあると思うので、来年は集まってやりたいなと思う。最後に念押しで言うておくと、アンケートの案内は短文で作ってもらうようお願いします。

弘前大学 代議員：中執報告①で獲得目標をしゃべった。その中に、自分の大学に各地の取り組みを持ち帰って全国に広げるということがあった。もうすぐ終わろうとしています、みなさん持ち帰っていきましょう。